土木・建築
偉人伝
VOL.20

人々の心と文化を豊かにする美術館。近代化以降、日本でも公立美術館が開設され始めるなか、いち早く私立美術館として誕生したのが、大倉集古館だ。関東大震災で建物・所蔵品の多くが焼失するも、昭和二年に再建。アジアの重要な文化財を多数抱えて現在に至る。今回紹介するのは、この大倉集古館と、その再建を手掛けた偉人のエピソードだ。

東洋の至宝を守る、美しく堅強な美術館を手掛けた偉人

伊東忠太

Chuta Ito

［一八六七年～一九五四年］

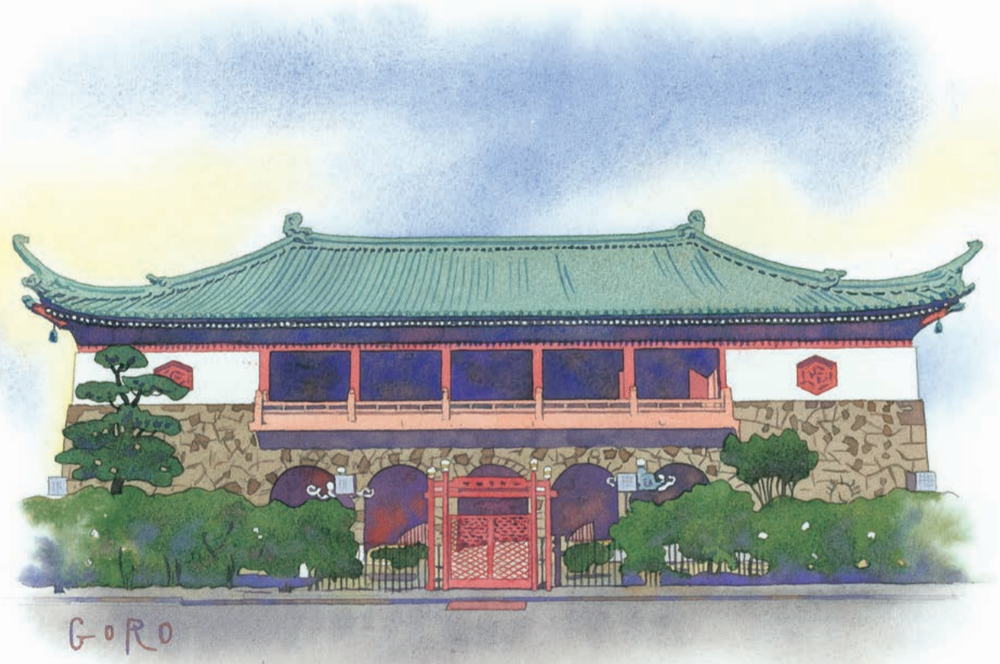
伊東忠太は慶応3（1867）年、米沢藩（現・山形県置賜（おいたま）地方）に生まれた。明治25（1892）年に帝国大学工科大学造家学科（現・東京大学工学部建築学科）を卒業。そのまま大学院に進み、建築家・建築史家としての道を歩んでいく。

伊東の研究は、建築様式の変遷が歴史のなかで各国・文化間の相互影響に基づいて起きたものであることを解き明かし、これによって日本建築を建築史上に位置付けようと試みるものだった。代表的な著作に、法隆寺の柱に着目してその起源を古代ギリシア建築に見る「法隆寺建築論」（明治26年）や、建築様式の変化を独自の視点で説明した上で日本建築の「進化」を説く「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」（明治41年）がある。

また建築家としても、平安神宮改修をはじめ、生涯を通して多くの建築に携わった。寺社保存・建築に深く携わり、伊勢神宮造営にあたっては工事計画の策定・統括を担い、築地本願寺造営では設計を担当した。また、寺社以外にも大倉喜八郎（きはちろう）ら実業家の邸宅や東京商科大学（現・一橋大学）の兼松（かねまつ）講堂などを手掛けている。

伊東は中国など諸外国を周遊して各地の文化・建築を調査した。そこで得た知見が発揮され、世に送り出した作品は研究・建築のいずれも独自性のあるものが多い。昭和18（1943）年には建築界初の文化勲章を受賞し、昭和29（1954）年に没した。

昭和2年建造の「祇園閣（ぎおんかく）」。隣接する邸宅と共に、元は伊東が設計した大倉喜八郎の別邸だ。大倉の意向で屋根は金閣・銀閣にちなんだ銅板葺き、その意匠は祇園祭の山鉾（やまぼこ）を象った。中国の敦煌（とんこう）石窟を模した壁画など随所にアジア風の装飾が練り込まれ、持ち主と自身の嗜好を見事に融和させた伊東らしい建築だ。［写真：PIXTA］



大倉集古館がそびえるのは、港区虎ノ門2丁目。隣接するホテルオークラと共に、2014年から改修工事中だ（2019年秋竣工予定）。建築主・大倉が抱く東洋進出の大志を映した、幻想的で荘厳な中国様式の建築。それが今、再開の時を静かに待っている。

日本初の私立美術館である大倉集古館は、実業家・大倉喜八郎によって大正六（一九一七）年に創設された。大倉が蒐集（しゅうしゅう）した日本、中国美術など世界有数の所蔵を誇ったが、関東大震災で建物と共にその大半が焼失。生き延びた品々を携え、昭和二（一九二七）年に再建されたのが現在の建物だ。

設計者は伊東忠太。二度と名品を失わぬよう、木造だった建物は耐震・耐火設計の鉄筋コンクリート（RC）造になった。元々、大倉が美術館を建てたのは、貴重な文化財を国外流出・散逸から保護し、また住居保管の火災リスクから守るため。それ故にRC造での再建となったのだろう。

ところでこの時、伊東は建物を中国風に仕立て直した。展示物や大倉財閥の中国進出に寄せてのことだ。だが同時に、伊東なりの考えもあった。中国建築は石造の歴史を持ち、日本文化と馴染み深い。学者として材料と様式の関係に着目した彼は、集古館にふさわしい装いをRC造で見事に実現した。

大倉集古館の設立当時、国内における美術館とは所蔵品を持たない、ただの展示場だった。そのなかで集古館は自前のコレクションを有し、無償で公開。市民の文化醸成を助けた。また美術館として蒐集物の管理を組織化したことにより、後に戦中・戦後の激動のなかで名品が散逸することを防いだ。

伊東が手掛けた集古館は、戦禍も耐え抜き現代に受け継がれた。建物自体も有形文化財となり、今も東洋の至宝を守り続けている。

※ものを集める、とりわけ趣味・研究のために貴重な品を集めること。骨董品や美術品などについてよく使われる。コレクション。

絵：佐々木悟郎